

郷土紹介



現在、上賀賀一丁目にある天神児童遊園の場所は、かつて天神の池の水が満々と水を湛えていたところでした。この池は南北に分かれ、延面積約千坪（三千三百平方メートル）、池の水は下流で谷沢川に流れ、用賀村、野良田村（現在の中町一帯）にかけて貴重な農業用水として利用されてきました。

その歴史は、今から二百八十年前、江戸時代中期の享保年間に通ります。

地形的に高台に位置する用賀村の人々は、新田開発の為、この谷地に天水池を造成することになりました。工事方法、工事期間等につ

いての詳細な資料は残っていませんが、享保五年の記録に用賀村田方用水池に立に付水四十八段下さるゝと潘より工事費の一部が支給された様子がわかります。

池の西、小高い丘に古くから天神の社があったので村人はこの池を「天神の池」と呼んで大切に維持して参りました。古老の人達は、今でも、この辺りを池上、池下、池端と呼んでいます。

そして、昭和九年より始まった上賀賀地域の耕地整理工事の時、この池は全部埋め立てられ、歳と共に住宅地になって行きました。

今、周辺にはモダンなマンションが建ち、天神の池の名前も消えてしまいました。（飯田）

文芸

六年生、ありがとう

用賀小学校一年生

くろ田 りさ

ぼくたちのきょうしつ、そうじとしてくれて、どうもありがとうございました。一年生のへやのそうじはたいへんだったとおもいます。ドッジボールもやってくれてありがとうございます。六年生のたまは、とってもよかったよ。



山さき さとし

土ほし あずさ
そつぎようおめでどうございませう。
二がっき、おにごっこやだのしいことをやってくれてありがとうでございます。げがをしたとき、ほけんしつにつれていってぐれて、とてもうれしかったです。



サッカー大好き人間

三子玉川 十津川 博義

今年、二十六才になる長男が、三子玉川スポーツ少年団のサッカー部に入部した時からのご縁だから、もう二十年以上にもなるサッカーのおつき合い。

Ｊリーグがテレビで放映されるようになつたので、どこの家庭でも話題になるほどサッカーは知られて来た。アロ野球とくらべると以前は今よりマイナーなスポーツだったと思う。

小学校の子供たちの試合の応援で、多摩川の河川敷のグラウンドに一家をあげてかよったことや、毎年、尾瀬の入口である、群馬県片品村での、夏の合宿などで

SPORTS

〇首都圏高速補強工事の一部が使えるようになる駐車場。その代役として、形西側の道路脇に、192台分が開設。

〇平成七年度のあひだどう賞。空母リサイクルで車椅子を寄付した小野茂さん（上賀賀手目）。

ボランテア活動の福島宣申さん（用賀手目）、町の環境美化に尽力の東山君恵さん（用賀手目）と木次輝代さん（用賀手目）、スポーツを通して青少年の健全育成に貢献の長沼世紀さん（瀬田手目）。

長年にわたる地道な活動に感謝。

〇春の交通安全。あたたかな陽気について心も体も浮かれがち。ハンドルを握る方も歩く方も気を引き締めて。



忘れ得ぬ感動の場面に数多く出会った。
スポーツに熱中する子供たちが、同じ目的に向って練習する経験を通じて、自然に身につく教育的な効果は、計り知れないものと思ふ。

近年話題になる「いじめ」の原因のひとつは、ストレスのゆがんだ発散などが言われているが、チームメイトとボール一つに心を集中して一体化することがストレスの解消につながる。

サッカーを通じていつまでも共有したいので、日曜日ごとにグラウンドで笛をふいている、サッカー大好き人間である。



春の訪れと共に花のたよりが聞えてきました。

日本の春は人の心を楽しくしてくれそうです。とスペインからこられた方、お子さんの成長を一番喜ばされるおあさん、先輩が後輩に「夢」をテーマに語られた同校卒業生、また一年生が卒業する六年生に綴る、お祝いとお別れの言葉などなど。

今回のひろば37号は「春のうた」をメインテーマに、明るく内容にしてみました。四季の中でも春は、希望と未来に向けての出発点ではないでしょうか。

